
孤独と少女と巨人

TMAT+O2

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

孤独と少女と巨人

【Nコード】

N0576Q

【作者名】

TMAT+O2

【あらすじ】

巨人のぼくは、この街の用心棒をしている。でも、ぼくは孤独なんだ。

砲撃音は夜の静寂を破る。夜明け前の山道をじりじりと進んできた戦車は、突然砲弾を次々撃ち放ち、ぼくの顔面や脇腹のうえにとりと落ちる。足の裏ほどの大きさでしかない戦車を、人で言うハエを払う動作と同じように手で押すと、なかから人が慌てて飛び出した。

ただただ無言で砲身を折り、キャタピラを剥いだ。以前、なにもしずくに帰してしまった時は報復に二倍の戦車団がやってきたことがある、ほとほと困ったものだ。

戦車を振って、人を追い出すと戦車を丸ごと握り潰す。

ぼくは街門番の任を負っている。戦車団の狙いは、ぼくを殺すことだけど、それはこの街の侵略に邪魔な存在だからだ。どういうわけか、この街はよく軍隊に狙われる。来ない月はけっしてなく、まれに一週間連続なんてこともある。

戦車全てを再起不能にすると、ぼくはやっと一息ついた。巨人のぼくには、人の作れる大きさの武器じゃ、痛くも痒くもない。ちくりとすることが百回に一回あるかないかだ。

それでも軍人たちはぼくにひたすら銃口を向けている。時間と共に弾は尽きる。無意味なことだと気付くのに時間がかかる。ついに諦めたのか、朝日がさしはじめた頃合いに、掻き消えるように軍人たちは去り消えた。

地面に腰をおろして、地面に転がる軍人を一人見下ろした。

殺人をしてはいけないとは言われていない。でも、人間の区別なんて、ほとんどできない粗野なぼくに、簡単に人間を殺すという選択肢はない。間違えて、守るべき街の人達の手足をもいでしまったら、洒落にならないのだ。

自決を試みた軍人一人を拾い上げると、ぼくはそいつを門内に託して、もう一眠りと横になる。

この街の出入り口は、大門一つ。

防壁は石で固められていて、戦車の砲弾といえど、崩すことは敵わない。唯一の出入り口は、防壁と比べると薄く作られているが、そこに控えているのはこのぼくだ。

ある日、ある人がこんなことを言った。

「けっして英雄視されず。けっして贅沢はできず。けっして我侭は言えず。そんな生活のどこがいいんだい？ あんたなら、大国に行つて軍人にでもなれば、英雄視もされるし、贅沢もできるし、どんな我侭でも通るだろう？」

その時は、なるほど考えたこともなかったと感心した。だけど、考えて突き詰めている内に自分はそういうものに興味がないことに気がついた。強きに屈せず、弱きに味方する聖人君子というわけではない。

毎日食つては寝て、敵がきたら手をばたつかせるだけの楽な仕事を誰が嫌がろうか。

見下ろしてみれば、毎日重い荷物を隣町まで運んで小金を稼ぐ人がいる。小麦の成長具合を、毎日じつと観察して溜息をつく人がいる。家族のため、山に猟へ出る男たちがいる。

そんな生活は煩わしい。ぼくにはとてもできっこない。

暇つぶしに防壁を眺めていると、よじのぼってぼくの顔の高さまで登ってきた少女がいた。

目があつた途端に、彼女は微笑んだ。ぼくもつられて笑う。

「ねえ。お兄さんは、どこから来たの？」

「さあ、どこだろう。たしか、産まれたときからこの辺に住んでいたと思うんだけど」

「じゃあ、名前はなんていうの？」

「さあ、なんだろう。そういえば、そんなこと聞かれたことも、言われたこともなかったなあ。みんながぼくのことを巨人って呼ぶから、それが名前かもしれない」

「変なの！　じゃあ、あなたの名前は今日から巨人さんね！」

一方、彼女の名前はメアリーと言った。指先で捕まえたなら、すぐに折れてしまいそうな体つきをしていて、傷を付けないように掌で掬いあげるのには苦勞がいる。可愛らしい外見とは裏腹に、その瞳は鋭いうえに好奇心に充ち満ちている。

ぼくが喋るときにはメアリーは耳を塞いで、話を聞く。

ふと自分から聞いてみたいことができた。

「メアリーは、ぼくが怖くないのかい？」

「こわい。とってもこわい」

彼女は白い歯を剥き出しにして、口角をあげた。

「でも、みんなが言うほどこわくないよ」

「みんなが？」

肩を竦めた。

「そう。みんな、巨人さんには近づいちゃいけないって言うの。殺されちゃう食べられちゃうって、お母さんも、お父さんもみんな心配してるの」

商人は、ぼくを益と見る。何故なら商品を守るから。山賊の抑止力になるから。

でも、街人全員がそうとは限らない。街を守るのに、巨人の力なんて必要ないのだと騒ぎ立てる人たちは絶えない。彼ら曰く、戦車数百台来ようとも街の軍勢力で十分撃退できると試算できたらしい上に、巨人を退治しようと軍は攻めてくるのだと言った。否定的でないにしろ、肯定的でない人間ならもうそこら中にいる。何かあれば追い出してしまおうと目論んでいる。

今日だって、虎視眈々とぼくが失態を犯さないか見張ってる奴がいるんだ。

こういうと、まるでぼくが被害者であるようだ。

心を落ち着けて、溜息をつく。メアリーのブロンズが、葉枝のよう揺れる

「仕方ないね。なにせぼくはでかいから」

「態度は小さいね。もっと、どーんと構えちゃえばいいのに！」

「無茶は言わないでおくれ。ぼくを倒そうとしている人が一杯いるんだから」

特に元軍人だ。

軍団が攻めてくる度に、責任者は腹を切る。何故腹を切るのかと問いたですと、そういうもののだそうだ。街人の治療の甲斐あって助かる軍人は、すでに何十人にもものぼるが、なかにはぼくのことを酷く忌み嫌っている人もいる。

軍人としての死に場所を失ったあの、祖国の家族に会わせる顔がないだの喚くくせに、ちゃっかり家庭を築いた奴だっている。

「そうだね。わたしのお父さんだってそう。遠い国で偉い人やっていたんだって。でも、巨人さんに助けられちゃって……って。ありがとね」

「殺さなかつただけさ。頑張ったのは、きみのお父さんだよ。残念ながらね」

とつぜん空一杯に発砲音が響き渡る。

僕の指先に小柄な体が張りついた。どうやら、どこかで猫をしているらしい。

「大丈夫。危険はないよ」

小指でメアリーの頭を撫でる。

「巨人さんは凄いいね。わたしなんかじゃ、銃の音ってこわくて」

「ぼくは銃にあたっても、死にしないからね。猫の人なんかは、軍人出身の人もあるから結構目の仇にされてるんだ。朝は戦車に、昼は街の人に照準を付けられる。慣れっこさ」

「ごめんね。わたしのお父さんも、その中にいるの」

謝られることじゃない。ぼくは、銃を撃つ人を恨んでやしない。心がある以上は煩わしかったり、邪魔くさかったりという思いは禁じ得ない。だけど、どうしてぼくがそれに文句を付けられようか。拳銃、猟銃、戦車なんかよりも遥かにぼくの方が危険なんだから。

「あとでお父さんを叱っておくから！ もう巨人さん驚かせるのは

やめて！って、あと今日ね。わたしのたんじょ……！」

周辺一帯を耳を塞ぎたくなるような爆音が炸裂した。

咄嗟にぼくの腕に抱きついたメアリーは小刻みに震える。そして――。

指に寄りかかっていたメアリーが、するりと隙間を抜けて、落ちていく。

もう片方の腕でメアリーを追う。しかし小さすぎる体は腕にひっかかることがない。

落ちる。

地面に落ちる。

大門の前が鮮血に染まった。

頭から落ちた彼女の華奢な体は折れ曲がり、人間のとれる体勢ではなく、だくだくと血液が流れていく。指先に纏わり付いた彼女の温もりが、荒んで感じられた。

一部の経過を見ていた男が叫び声をあげた。

「巨人が……！ 巨人が！ 暴れ出したぞ！」

馬蹄が地面を叩く。商人の荷車は、慌ただしく駆けていく。

「メアリー……！」

大門が次の瞬間には閉じた。

ほんの一瞬の出来事だった。

それからというものの、人間の怒りの火勢は強まって、日が暮れる前にぼくは就縛され、処刑所へと引き摺られた。何重にも巻かれた縄だが、強引に解くことは容易に感じられた。

「俺が獵から、帰ってみれば……わたしの娘を返せ！ わたしの……メアリーを……！」

獵銃を背中にした男が、涙ながらにぼくの体を人間用の処刑刀で斬り付ける。力一杯、振り下ろしてもぼくの体には食い込みすらしない。

獵銃を握った男たちの横には、ひしゃげた巨大な猪がひかれていた。

狂騒的な人の波。耳を澄ませてみると、「娘さんの誕生日に、大物を仕留めた」のだそうだ。

「こんな危ない化物！ 殺してしましましょう！ 事故であるはずがないわ！」

いままで、意図的に街人を殺したことが一度だけあった。

その時は、不埒な浪人に腹を立てて、握りつぶしたのだった。目の上のタンコブであつたらしい男を殺しても、街人は仕方のないことだと、平然と笑っていたことをぼくは覚えている。

だから、ぼくを助けて欲しいなどと思っていやしない。

メアリーほど純粋な大人はこの中にはいないのだ、と思ったただけだ。

「死刑にしろ！」とコールがあがる。

次第に大きくなっていく、その声にぼくは覚悟をした。目を瞑る。出会ったばかりの少女の事故にも弁明せず、ぼくは死を覚悟している。この心理はどこから来ているのだろうか。火炙り、首切り、水攻め。色々な死刑方法がぼくには試されている横で、ぼくは出来損ないの頭で考えた。

火はぼくの皮膚を焼くには弱く。沈めるだけの大きな池はない。

また、首を切れる刀がない。

「死にたかったんだろうか」

かもしれない。

同じように巨人だった両親も、兄も妹も。飢えと病に次々と倒れていった。

ぼくがこんな街で一人働いているのは、ぼくが孤独だったからだ。メアリーはぼくにとって、名付け親で友達になり得る人間だった。ぼくの縄はほどけない。

（後書き）

初めて小説を書いてみました。まだ比喻というのがやや分からず、なかなか勉強も大変です。起承転結は書いてみたのですが、難しいですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0576q/>

孤独と少女と巨人

2011年3月29日12時10分発行